

# ぎゃくし⑨

2018年デジタル版

gyahunkoubou.com

パート4  
死んだら  
こうなりたい

パート3  
死んだら  
どうなる？

パート2  
どう生きる？

パート1  
人生はくじ引きだ

精神的に

向上心のあるものは  
馬鹿だ

〈精神的に向上心のないもの〉  
の生きかたを探る  
リトルマガジン

ぎゃくし

ぎゃふん㊦試し読み版

ଆମିକା®



ଆମିକା

## はじめに

「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」

夏目漱石『こころ』で、主人公の「私」（先生）は、友人のKに向かって上のように言いなつ。もともとはKが「私」に対して使った言葉であり、「私」がほんとうにKの向上心のなさを非難しようと発したのではない。恋敵であるKに「復讐」しようと目論んだ結果、口から出たものだ。最初からこの言葉は欺瞞ぎまんに満ちている。

世のなかの人々は「精神的に向上心のあるもの」になろうとする。それが「ふつう」の生きかただからだ。「精神的に向上心のあるもの」をめざさないのは、自堕落な人間か、怠け者か、いずれにしても、この社会では評価されない者どもだ。

なぜ人は「精神的に向上心のあるもの」になろうとするのか？ そうすることで、一端いっぱしの人間になれると思っているからだ。幸福になるには、そうしなければならないと感じている。この社会では生き残れないと考えているのだ。

だが、「精神的に向上心のあるもの」が必ずしも幸福になるとはかぎらない。なぜなら、〈人生はくじ引き〉だからだ。そのことを、本号では述べていきたいと思う。

自分が幸せに暮らしているのは、たまたま〈運〉がよかったから——あなたは、そう考えたことはないだろうか？ 世のなかには、不慮の事故、不幸な病気などで亡くなる人がいる。不可抗力によって貧相な暮らしを余儀なくされている人もいる。そういう人はハズレくじを引いてしまった、と考えることはできないだろうか？

〈人生はくじ引き〉だが、一等、二等、三等……と、くじには多くの種類がある。数種類なのか、数百なのか、数万なのかは定かではないし、そのことはいまは問題ではない。あなたが引いたくじはアタリかハズレか、それが重要だ。

〈人生はくじ引き〉と考える人生観・世界観が多くの人に受け入れられるとは思っていない。本号をしっかりと読みいただいたとしても、納得していただける保証はない。

ただ、ここで立ちどまり、自分の人生を振りかえるきっかけにはしてほしい。アタリくじを引いたつもりで幸福感に浸れば、それはそれでよいことだ。「ハズレくじを引いてしまった」と思っているのなら、今後の人生をどう生きるか。それを考える参考にでもしてもらえれば幸いだ。

# もくじ

はじめに	4
------	---

## パート1

精神的に向上心のあるものも <b>人生はくじ引きだ</b>	7
-------------------------------	---

佐藤留美『なぜ、勉強しても出世できないのか？』

中野雅至『格差社会の世渡り』

ロバート＝H＝フランク『成功する人は偶然を味方にする』

常見陽平『普通に働け』

ギャビン＝ニューサム『未来政府』

谷岡一郎『ツキの法則』

## パート2

精神的に向上心のないものは <b>どう生きる？</b>	33
-----------------------------	----

『1日外出録ハンチョウ』

『Mr. ビーン』

『ハンニバル』

『ウルトラマンオーブ』

## パート3

精神的に向上心のないものが <b>死んだらどうなる？</b>	43
--------------------------------	----

『ほんとにあった！呪いのビデオ』

『闇動画』

『封印映像』

## パート4

精神的に向上心のないものも <b>死んだらこうなりたい</b>	55
---------------------------------	----

『ぼのぼの』

『けものフレンズ』

『みなみけ』

『ぎゃふん』制作メモ	62
------------	----

精神的に向上心のあるものも

# 人生はくじ引きだ

〈人生はくじ引き〉と言うと、「自分の努力不足を運の悪さのせいにするな」「そこまで人生を悲観しなくても……」などと思う人もいるかもしれない。「真面目に取りあうべき考えかたではない」と一笑に付す人もいるだろう。だが、これは本誌だけが主張する世迷言ではなく、似たようなことを述べている書物がけっこうあるのだ。ここではその一部を紹介しながら、持論を展開してみよう。

# スキルアップしたからって 成功するとはかぎらない

「精神的に向上心のあるもの」。これをビジネスパーソンに置きかえると、「キャリアアップやスキルアップをめざすもの」と表現できるのではないか。まずは、これらの“欺瞞”から考えてみよう。

## 「スキルアップしなければならぬ」のは幻想

ビジネス雑誌や書籍を開けば、つねに「キャリアアップ」や「スキルアップ」があつかわれている。リーダーシップやノート・手帳、コミュニケーションなど、テーマはさまざまだけれども、めざすところは「キャリアアップ」「スキルアップ」だ。「成長する」「成果をあげる」といった表現をそこに加えてもいいかもしれない。

そもそも私自身、本職のライター業ではビジネス雑誌・書籍を手がけることも多い。雑誌によってテーマや切り口は異なるが、とどのつまり落としどころは「スキルアップ」や「成果をあげる」だ。もつといえは――。

お手元に『ぎゃふん⑥』をお持ちのかたは、特集「小説家の仕事術」を開いてほしい。ここでも「スキルアップ」が裏のテーマとし

て流れている。そもそも「なぜスキルアップしなければならないか」は説明していない。スキルアップの必要性については、書き手にも読み手にも不要ということだ。

ようするに、猫も杓子も「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という前提を無意識に受けいれているわけだ。

だから、ビジネスパーソンたるもの、すべからくスキルアップをし、成長して、成果をあげなければならない——そんな“錯覚”にとらわれてしまう。

だが、人はそこまで「スキルアップ」しなければならないのだろうか？ だれもかれもが「成長」しなければならないのか？ ここで冷静に考えてみたい。

## 「スキルアップ」は多くの場合ムダに終わる

本書の著者は、私とおなじようにビジネス雑誌や書籍を手がけるライターで、これも私と同様、ビジネスパーソンに「スキルアップ」を煽ってきた“戦犯”だ。

本書の著者は自身の経験から、ビジネス雑誌などのメディアでうたわれた「スキルアップ」の正体を喝破する。

我が国のスキルアップ教の歩みは、そっくりそのまま、リクルートの戦略だったと言っても、決して大げさではなさそうだ。

[中略]

情報の受け手がメディアを通して「流行っている」と信じ

込まされている現象は、実は情報の出し手による商売繁盛のための戦略であることが多いのだ。

実際、メディアで「成功者」として紹介されていた人物は、ほんとうに成功したかどうか疑わしいという。

本書執筆にあたり、気になって、このムック 〔引用者注：著者が携わった女性起業家特集したムック〕 に登場した女性起業家たちをネット検索したところ、かなりの人が会社を売却、あるいは畳むなどして、経営から離れているようだ。

言うまでもなく、本誌も本書の著者も「スキルアップ」や「成長」を全否定するわけではない。一方で「向上心」を発揮しても、それが徒労に終わることがあるのもまた事実。

本書の著者はこう語る。

勉強したり、高みを目指して自己研鑽するのは良いことだ。だが、胡散臭い流行に飛びついたり、見当違いな勉強をしたり、また、その効果に期待し過ぎたりすると、肩透かしを食うケースも多いのである。

では、「向上心」がムダになるかどうかはなにで決まるのか。本書はずばり「運」だという。

自分のキャリアは常に、マーケットとともにある。そして、株式投資同様、マーケットは読みにくい。勝ち逃げできるかどうかは、多分に運にも左右される。

もちろん、成功者が「運」だけで世のなかをわたってきた、などというつもりはない。その人は「精神的に向上心のあるもの」で、それが報われた結果なのだろう。一方で、「精神的に向上心のあるもの」が必ずしも成功するとはかぎらない。これも疑問の余地はないはずだ。

その人が、その職業を、その手法でたまたま成功しただけで、一般的に、読者が同じように同じことをやって果たして成功できるか疑わしい。

「向上心」があっても成功できるかわからないなら、「向上心」を持つことが人生の戦略として正しいかどうか疑問が生まれる。

本号で言いたいのはその点なのだ。📖



なぜ、勉強しても出世できないのか？  
いま求められる「脱スキル」の仕事術  
佐藤留美  
ソフトバンク クリエイティブ

「精神的に向上心のあるもの」が  
成功するとはかぎらない

# 努力が報われない社会で どう努力すればいい？

「努力」という言葉も「精神的に向上心のあるもの」が好みそうだ。「成功するためには努力が必要」「努力すれば報われる」などとよく言われる。ほんとうだろうか？

## 努力の量が成功に結びつくわけではない

『ぎゃふん⑧』でも述べたとおり（35ページ）、「努力がムダだ」と言いたいわけではない。努力は必要だ。しかし、それは「宝くじは買わなければあたらない」とおなじいでどの意味しか持たないのではないか。

だれだって努力はしている。あなたも、私も……。では、「勝ち組」と「負け組」を分かつのは、その努力の差なのだろうか。

本書の著者もこの点に疑問を抱く。

私が疑問を感じる二つ目は、「起業家と努力プアとの差」は努力の違いによって生み出されたものかどうか、という点です。「努力の方法が異なった」というだけで、両者の努力量に違いがあるとは思えません。いわば、努力の質が

違うだけで量は同じだということです。

たとえば、収入が2倍ちがう人は努力の量も2倍ちがうのだろうか。けっしてそうではないだろう。「努力」と称する「向上心」が必ずしも成功を保証するわけではないのだ。

### アタリくじを引かなければ努力はできない

快挙を成しとげたスポーツ選手や、一代で財を築いた起業家などは、当然、人並み以上の努力はしたことだろう。だが、なぜその人たちはそこまで努力することができたのか？ そんな疑問を持ったことはないだろうか。

**努力を続けるためには何が重要でしょうか。簡単です。自分の好きなことをやるべきなのです。努力が継続しないようなことを選択すべきではないのです。**

成功したスポーツ選手は、そのスポーツがなによりも好きだったのだろう（少なくとも嫌いではなかったはず）。成功した起業家も、その仕事をするのが好きだったにちがいない。

スポーツ選手や起業家の成功は、たしかに努力の賜物たまものであろう。だが、その前提には「それが好きであること」があったはず。では、「それが好き」であったことには、なんらかの戦術が含まれていたのだろうか？ 「人生で成功するために好きになろう」というような。それは考えにくい。本人の生まれ持った資質なのか環境的な要

因かはわからないけれども、たまたま「それが好き」だったのでは？  
つまり、「それが好き」だったのは、〈運〉だったのだ。

人生のアタリくじをそこで引いたことになる。

そこまではいいとしよう。問題はここからだ。

「よし。毎日、苦痛に耐えながら嫌な仕事をつづけて人生を浪費するのはやめよう。好きなことで努力してみよう」と息巻いても、それが成功に結びつくかどうかわからないのだ。

**悩ましいのは、自分の好きなことが「どう考えても、生活維持手段に向いていない」「これから廃れる職業だ！」という場合です。**

自分の好きなこと、モチベーションのあがること、努力できることが、不運にも成功に結びつくものでない場合、その人はハズレくじを引いたのとおなじだ。

この問題に対する解決策は、残念ながら本書の著者も持ちあわせていない。

**どうしましょうか……。私にもよくわかりませんので、親か学校の先生にでも相談して下さい。**

## **〈人生はくじ引き〉にしないための突破口は？**

この日本が努力の報われる社会——努力のすべてでないにしても——なのであれば、喜んで努力しましょう。失敗が努力の不足だった

のであれば、その事実を真摯に受けとめることもしよう。だが、いまの日本はそうなっていない。

がんばった人の中にも報われていない人がたくさんいますし、「金儲けに成功している人」も「がんばった結果」かどうかはわからないということです。実際には、偶然の占める要素が相当大きいと思いますが……。

こんなことでは、やはり「精神的に向上心のあるものは馬鹿だ」と自嘲せざるをえない。

なぜ〈人生はくじ引き〉になっているのか？ おそらく社会が歪んでいるからだろう。本来ならば、社会システムがその歪みをただす役割を果たすはずなのだが、そのようには機能していないと考えられる。だから、その機能不全を改善しようと「努力」することこそが、人生の負け組の突破口になるのではないかと。

努力をして成功を勝ちとろうとしても  
運が悪ければ実らない



格差社会の世渡り  
努力が報われる人、報われない人  
中野雅至  
ソフトバンク クリエイティブ

つづきは正式版で  
お楽しみください。

ギヤhun<sup>®</sup>

© 2001 - 2018 GYAHUN Koubou

2018年1月1日 発行  
2022年3月3日 デジタルリマスター版 発行

出版者 米田政行

発行所 Gyahun工房  
mail@gyahunkoubou.biz